日本海新聞　2009年（平成21年）11月25日　水曜日

途上国の問題について、農家・政府・民間企業・市民の立場になり、コミュニティーレベルで一つの問題を考えるグループワーク。それぞれの代表が話し合う

ITPだより

砂と暮らし 砂に学ぶ ㉖

世界への責任大きい日本

今月11月から1カ月間、シリアの国際乾燥地農業研究センターで乾燥地に関する講義が行われた。講義ではシリア、チュニジア、パレスチナ等の学生らと共に、干ばつや土地の劣化、砂漠化など、乾燥地が抱えるさまざまな問題について学んだ。

授業中、世界の中での日本の立場について考えさせられる場面があった。それは砂漠化の講義の中で、地球温暖化について話し合っていた時だった。

学生の1人が、「先進国は多量の二酸化炭素を排出しても何とも思わない。なぜなら先進国には砂漠がなく、砂漠に住む人々の苦しさをわかっていないから」と言った。私はその言葉を聞いて、先進国であり、多量の二酸化炭素を排出している日本の、世界に対する責任の重さを感じた。

それと同時に、砂漠化などの地球規模の問題について、どれほどの日本人が危機感を抱いているのだろうと思った。乾燥地で起きているこの危機に対してどう行動すべきか、しっかり考え、行動していきたい。

（鳥取大学大学院農学研究科学生・川口子葉）

（水曜日に掲載）